松里中学校　校内研究

「生きる力を育成する教育の創造」
～　基礎学力を定着させる指導と評価の研究　～

Ⅰ　研究の具体的内容と方法

（１）　基礎学力向上の取り組み

国語(漢字)・数学(計算)・英語(単語)をすべての学習の基礎として捉え、年間２３時間を基礎学力向上の取り組み時間にあて１年を通して計画的に設置し、１１回のテストとその取り組みの時間に充て、学期末の検定を実施した。それに向けての取り組みにより、家庭学習の定着と充実を図る手だてとし、また、残りの時間(23-14=9 時間)をクラス毎に取り組んだり、ふれあいの時間や放課後等を利用しながら、小集団学習等を意図的に仕組むことで、学習することへの意欲とわかる喜び、また、テストの機会を増やすことにより合格する喜びを味わわせながら、学習への意欲と基礎学力の向上をねらった。

また、取り組みシートを設け、目標点や家庭学習の取り組みのようすを記録したり、学校での取り組みをするワークシートを統一、各自の取り組みを行い、それをテスト及び問題出題プリントをファイリングすることにより、各自の取り組みのようすや変移が、本人・教師・家庭と、どの目からもわかりやすくなるように工夫した。

（２）　ＮＲＴ・ＣＲＴ・ＡＡＩの分析と授業の取り組み

ＮＲＴ・ＣＲＴ・ＡＡＩの分析を教科・学級・学年毎に行い、その分析データをもとにそれぞれでの課題を設定し、授業や学校生活に課題解決のための手だてを仕組み、生徒の変容やＣＲＴ・テスト等から検証を行った。

分析データをもとに、仮説を立てた研究授業を行い、それをもとに取り組みのようすや、生徒の変容をつかむ手だてを工夫した。

（３）　評価について

４月、各家庭にシラバスを配布、合わせて１学期末に各教科ごとの評価の実際を知らせることにより、学習する内容と評価方法をわかりやすく事前に伝えることにより、学習への意欲と目的を持って授業に望む手がかりとなり、学習意欲の向上と教育活動への理解につながる手だてとなると考えた。

Ⅱ　成果と課題

（１）　基礎学力向上の取り組み

国語・数学・英語の選択・学び合い学習として意味付けをして実施した。

基礎的・基本的内容をしっかり身に付けさせるために、基礎学力向上に向けた取り組みを全校で推進することは大切なことだと考える。また、計画的に取り組みやすかったことにより、学習効果が出ているものと思われる。課題となっている家庭学習の習慣化にどの程度有効だったか調査してみる必要がある。

テストの回数も適切で、家庭学習、及び、復習する力をつけられるものであった。しかし、今後出来なかった生徒のフォローをどうしていくかが課題である。この１１回の中で、中途半端になってしまった事は否めない。

学期末検定は学期をふり返り、もう一度確認するためにも実施は有効であったと考えられる。合格者の数も多く、生徒の意欲も高まってきた。ただし、充分な意識付けをしてあげるための時間が充分にとれず、今後の課題になると思う。また、(方法としては) 検定合格者が１学期９１名（５７％)、２学期８６名（５４％）であったが、検定合格者を増やす取り組みについて、何か手だてを検討する必要があると考える。

（２） 分析と授業の取り組み

続けることが大切である。平成１９年度からスタートする全国一斉学力テスト(国・数)とも関連させながら分析するとより効果的ではないかと考える。また、個々の生徒の力をこのテストの面から測ることが出来き、継続することにより学年が進んだときの変化等も研究出来るのではないかと考えられる。更に、継続して行う必要があり、現在、公に比較できるものなので客観的な分析に必要不可欠なもではないかと思う。

しかし、自分に甘い生徒・自分に厳しい生徒で差が出て正しい判断がされているかは疑問であり(学習意欲・表現力など)、今後分析には工夫が必要と思う。

（３） シラバスについて

各教科毎に身に付けたい力・評価の手だてを明示することは、教師の指導や評価の工夫や改善にも役立つと考える。また、生徒・保護者に示すことにより評価の信頼性が高まるのではないか。しかし、今年度作成をしたが、実際の場面では、教師側の立場として必ずしも有効に使い切れていたとはいえないので、教える側にとっても概要を頭に入れておく上で大切なものであり、今後も修正を加えながら作成することが望ましいと考えられる。

Ⅲ 成果物

○ 三大会テスト問題全１１回分・検定問題全３回
取り組みシート（学習記録取り組みカード・学習取り組みカード)

○ シラバス、評価の実際(全教科)

（文責 研究主任 小 林 誠 治）